

『……適当に書いて丸つけておいてねー♡』

『……も丸にしておいて欲しいです♡』

『わかんなかったけど丸にしてください♡』

期末テストの採点中、名前と記号問題以外は空白同然でありながら、そんなふざけた落書きをしてある解答用紙を見つめる。

名前欄を見る必要もない。見慣れた筆跡が解答用紙の主が七瀬レイナであることを物語っていた。

七瀬レイナ。俺が担任しているクラスの生徒で、既に推薦で大学に合格している三年生。普通ならば、このようなふざけた真似をする生徒は呼び出して指導。テストは当然落書きを無視してバツをつけていくのだが……。

「はあっ♡ うう……♡」

俺は興奮し、熱に浮かされたように空欄に模範解答を書き込んで丸をつけていく。間違っている解答は消し、正答を書き込み、同じように丸をつける。

その度に頭の中で『先生、私の言うこと聞けて偉いね♡』と言う七瀬の声が聞こえる気がした。

スーツのズボンの下でペニスが膨らみ、痛みを覚える。それでも先端から漏れ出る我慢汁がパンツを濡らしていく。

(レイナ様♡ レイナ様……♡)

自慰に耽る手を動かす時のように、興奮に導かれて丸をつけていく。

不正を行なっているという背徳感と、レイナ様の言いなりになってしまっているという事実が、俺の胸をひどくドキドキさせた。

そうして最後に『一〇〇点にしといてねー♡』と落書きされた点数欄に、一〇〇と記入する。

レイナ様の指示に従って改竄された答案。彼女自身はほとんど勉強することなく、容易く満点を得てしまった。

今回の試験はかなり難易度が高く、平均点は五〇点にも届いていない。八割正解者すら皆無なのだ。俺が答案を改竄したレイナ様を除けば。

その答案が他の生徒への裏切りとレイナへの忠誠の証であることを自覚すると、余計に興奮が強くなってペニスが硬くなる。

他の生徒が点を取れないようにして、レイナ様にだけ満点を献上する。俺はすっかり、生徒達を蹴落としてレイナ様を鼻屑することに躊躇いが無くなってしまっていた。

背徳感による興奮と、レイナ様から与えられるご褒美の甘美な味わいから、俺はもう逃げ出せない。

この場でズボンを脱いでペニスを晒し、自慰を行いたい衝動に駆られるが、それは叶わない。俺は、射精する権利すらレイナ様に奪われてしまっているから。

「はあ……♡ はあ……♡ レイナ様……♡」

言うことが聞ければ褒めてもらえる。指示に従えばご褒美が貰える。

レイナ様が行なっていたいじめを隠蔽してしまった一件以来、俺はすっかり彼女の言いなり奴隷になってしまっていた。しかも、脅されたりして嫌々従わされているのではなく、彼女に従うことに喜びを覚えるようにされてしまったのだ。

(この答案を返せば、きつと……♡)

パソコンにテストの点数を入力し終えた俺は、明日のテスト返却——正確には、その後のご褒美——を待ち望みなが

ら帰路についた。

※

「せんせー、お疲れ様あ♡ 二学期ももう終わりだねえ♡」

テスト返却のみで授業がない為に、ほとんどの生徒が下校した放課後。俺はレイナ様が訪れるのを教室ですっと待っていた。

「いやー、助かったよー。進路が決まってるから勉強する気起きないし、ちゃーんと先生が一〇〇点くれて♡」

「レ、レイナ様……♡」

ウエーブを掛けた長い金髪の毛先を、爪を塗った指先でくるくる弄びながら、レイナ様がゆっくりと俺の方へ近づいて来る。

冬服のブレザーを羽織り、ブラウスの生地を内側からパンパンに押し上げている爆乳を揺れている様子に、俺は釘付けになってしまう

その視線にめざとく気付いたレイナ様が、ニヤリと笑って真っ赤なネクタイを外す。

白のブラウスのボタンを三つも外して襟を開けている為に、ネクタイがなくなったことで深い谷間も健康的な色の乳肌も露わになる。

いや、見た目だけではない。ふわあ、と芳しい甘い匂いが谷間の中から漏れ出してきて、嗅覚まで支配してくる。

大きくてポリリウムのある乳房と長い谷間、甘いおっぱいフェロモンの匂い。それらが俺の心を惹きつけて離さない。

「ん〜？ 生徒のテストを改竄して一〇〇点にしちゃった先生はあく、どんなご褒美が欲しいのかなあく？」

俺が座っている席の机の上に腰掛けたレイナ様が、挑発的に両手でブラウスの襟元を開く。黒いレースのブラジャーが覗く胸元に、俺の視線は吸い込まれてしまう。

「おっぱい♡♡ おっぱいくださいっ♡♡」

耐えきれず、叫ぶと同時にレイナ様の身体にしがみついて豊満な乳房に顔を埋める。

「はーい♡ 先生の顔、おっぱいで捕まえちゃいましたー♡ うわ、挟んだだけでイキそうになってんじゃん♡ ダッサー♡」

ふわふわむにゅむにゅのおっぱいは顔面を優しく包み込み、俺の顔はとろける感触の中に沈んでいく。すると深い谷間の奥から香る甘い匂いが鼻に注がれ、興奮で一気に頭が熱くなる。

「あっははは♡ おっぱい欲しさに生徒の答案改竄しちゃうとか、ほんと終わってんね♡ ま、お陰で助かってるけどさー♡」

笑いながら、レイナ様は爆乳の谷間に顔を埋めている俺の頭を撫でてくれる。その手つきの優しさと、乳房のやわらかい感触、フェロモンの甘さがどんどん心を溶かしてくる。

「私のいじめを隠蔽して〜、出席日数ちよろまかして〜、提出してないのに課題が全部提出済みになって〜、今度は期末テストの改竄♡ 奴隷がちよろいお陰で学校生活とっても楽しいです♡ 先生はあ、何の為に教師になったんですかー？ 教え子のおっぱいに負ける為ですかー？」

頭を撫でる手つきの優しさとは正反対に、レイナ様はひどく意地悪な声色で問い掛けてくる。しかし、今の俺にとっ  
てはそれも興奮材料でしかない。

「はいっ♡ はいっ♡ その通りですっ♡ レイナ様のおっぱいに負ける為につ、レイナ様が快適にお過ごしできるよ  
うにする為に教師になったんです♡」

「あはははっ♡ サイッターの教師だね♡ 依怙鼻屑ってレベルじゃないじゃん♡ そんなに私のこと好きなんだ？」  
「はいっ♡ 好きですう♡」

レイナ様に躡けられてしまったせいで、すっかり彼女に崇拜に近い恋心を抱いてしまっていた。彼女の役に立ち、快樂  
に溺れながら敗北射精させてもらうことが至上の喜び。それこそが生き甲斐。

俺はもう、どうしようもないほどレイナ様のマゾ奴隷に堕ちていた。

暖房のついた校内いて冬服をきていた為に乳房は程よく温まっており、おっぱいフェロモンもむわむわと香っている。

頬を乳肉にぴったり密着させているとじんわりと汗をかいてしまうほど温まった乳房。当然、柔乳肌同士が密着して  
いる谷間の奥は汗とフェロモンが充満しており、そこまで顔を沈めてしまったら今以上の興奮に駆られてしまうだろう。

「そっかそっか、私のこと好きなんだ？ じゃあ、ご褒美にもっと深くおっぱいに潜って良いよ♡」

レイナ様はそう言うのと両手で後頭部を押さえつけ、グツと力を入れて俺の顔面をおっぱいの中へと沈め込む。

むにゅううん……と柔乳肉を頬で歪めながら、深い谷間の中を潜り込んだ先。おっぱいフェロモンの露が溜まった最奥  
に辿り着く。

「はーい♡ おっぱいばっばい♡ ばっばい♡ 私の為に成績改竄してくれたセンセにご褒美あげるねー♡」

レイナ様がむぎゆ、むぎゆ、と俺の顔を胸に押し込むたびに、ぴちやぴちやと谷間汗が顔に当たる。更にはおっぱいもむにゅむにゅと動かされているせいで、甘露が塗り込まれてしまう。

(あああつ♡ おっぱいフェロモン甘いっ……♡)

林檎を思わせる爽やかな甘さとミルク臭の混ざった甘い匂いに、理性がグズグズに崩壊していく。

「あま〜いおっぱいフェロモン嬉しいねー♡ このおっぱいが欲しくてほとんど白紙のテストを満点にしちゃったんだもんねー♡」

「あううっ♡ は、はいっ♡ そうですよ♡」

むにゅむにゅの乳肉に包まれ、谷間の中で返事をする。口から鼻から流れ込んでくる甘いおっぱいフェロモンの匂いが、理性も思考もほぐして溶かしてしまう。

「ほんとザッコ♡ こんなおっぱいマゾが教師とかみんなかわいいそー♡ 謝ったほうがいいんじゃない?」

おっぱいと俺の頭を両腕で抱え込み、むぎゆむぎゆぱふぱふと乳房を押し付けて圧迫してくるレイナ様が「謝れ♡

謝れ♡ おっぱいマゾの最低教師でごめんなさいって謝れ♡」と言いながら柔乳肌で顔面をもみくちゃにしてくる。

「あああつ♡ ごめんなさい♡ ごめんなさい♡ ご褒美欲しさにテストを改竄しちゃうおっぱいマゾの最低教師でごめんなさいっ♡」

口に出して叫ぶと、いつそう強い興奮と忠誠心が脳味噌に刻み込まれる。頭がおかしくなりそうなほど強いドキドキを覚え、レイナ様にもっと屈服して負けたいという欲が生まれる。

「うっわー♡ ほんとに言っちゃった♡ センセ、情けなさすぎでしょ♡ 恥とかプライドとかないの? あっ、もうそん

なの全部捨てて私の奴隷になっちゃったんだっけー?」

「そ、そうですねっ♡ もうレイナ様に負けさせてもらうことしか考えられないんですっ♡」

熱に浮かされ、うわごとのように叫ぶ。もはや恥も外聞も、教師としての使命感もない。教え子の爆乳に負けて射精させてもらうことしか考えられない、惨めな雄だった。

「そ・れ・で・く? そんなサイテーの先生はおっぱいだけで満足しちゃうのかなー? 他にもっと欲しいものがあるんじゃないのー?」

「そ、それはあ……♡」

「しっかりと口に出しておねだりしないと、聞いてあげないから♡」

胸の谷間から俺の頭を出したレイナ様が、カラーコンタクトの入った栗色の瞳で見つめてくる。

一瞬躊躇いはしたものの、もう我慢なんてできるはずもなく、俺は口に出しておねだりをしてしまう。

「射精っ♡ 射精させてくださいっ♡ 射精したくてたまらないんですっ♡」

言いながら、自分でベルトを外し、ズボンも下着も降ろして股間を晒す。

レイナ様の命令によって剃毛された股間。ペニスには金属製の貞操帯がつけられており、自分では射精ができないようにされている。

「うっわ♡ 教え子に射精おねだりするとかやばすぎでしょ♡ どんくらい射精させてなかったっけー?」

「期末テスト一ヶ月前からです……」

そう、俺は約一ヶ月もの間、射精することもペニスに触れることも許されなかったのだ。

すっかりパンパンに膨らんだ陰囊の中では行き場を失った精子がグツグツに煮えたぎり、ドロドロになってしまっているかのよう錯覚する。これだけ貯めさせられた白濁液を全て吐き出すことができたなら、どれだけ気持ち良いのだろう。

「ああ、一ヶ月かー。思ったより短かったね？ どうしよっか？」

短かった、という言葉に愕然とする。自分にとっては永遠にも等しい日数だったのに、レイナ様にとっては大した日数ではなかったらしい。

チャラリ、と軽い金属音を鳴らして、レイナ様が貞操帯の鍵を取り出す。

「ここで射精させずに、冬休みもつけっぱなしっていうのも、面白いんじゃない？」

わざと鍵を見せつけてから手のひらの中に隠して、レイナ様はこちらを煽ってくる。挑発だと分かっているけど、俺は必死になって懇願してしまう。

「い、嫌ですっ！ お願いです、お願いですから、ここで射精させてくださいっ！」

「あはははっ♡ センセ、余裕なさすぎ♡ 射精我慢させられて頭バカになっちゃった？」

「なった♡ なった♡ なっちゃいました♡ だからもう射精することしか考えられないんです♡ お願いだから射精させてください♡♡」

必死に縋りつく様子がよほど滑稽だったのか、レイナ様は心底愉快そうに笑う。それでも、やっと射精させてもらえるチャンスを逃すわけにはいかない。俺はいよいよ惨めに射精を懇願する。

「まあ、どうしても言うならいいけどー？ でも、そうだなあ……」



そこで一度言葉を切り、考え事をしたレイナ様が「そーだっ♡」と言って笑みを浮かべる。目を細めて口角を上げた、サディステイックな笑みだった。

「私さー、この学校に嫌いな子いるんだよねー♡ その子達の名前教えるからさ、通知表の数字を弄つといてよ♡ 真面目にやってるくせに私より成績低かった時の顔見て笑いたいから♡」

生徒の成績を不当に下げ、笑い者になる手助けをする。本来なら絶対に飲むわけがない提案を、しかし俺は考えることなく反射的に了承していた。

射精させてもらえるのなら、パイズリされてレイナ様のおっぱいに乳内射精できるのなら、どんな命令だって苦ではない。い。

「うっわあ……♡ 射精させてもらう為に他の子の成績まで改竄とか、流石にドン引き♡ ま、仕方ないかあ♡ 貞操帯つけられてるのに私のブラとか靴下とか買い取らせちゃってたし♡ 私の匂いはたっぷり嗅げるのに射精はできないの、辛かったんだー？」

「うううっ♡ つらかったです……♡」

レイナ様のおっぱいフェロモンがしっかり染み込んだブラジャーや、じっとり蒸れて匂い立つ紺ソックスを買わされたのに、それをオカズに自慰をすることが叶わないこの一ヶ月は、まさしく生き地獄だった。

「笑っちゃうよねー♡ 射精はできないのに、興奮する為にブラや靴下を買っちゃうなんて♡ 教え子のフェロモンいっぱい楽しめました〜？」

「はいい♡ いっぱい嗅いで楽しめました♡」

「ぶ♡ 変態じゃん♡ やばあ♡」

鼻で笑ったレイナ様が、手のひらの中でチャリン、と貞操帯の鍵を鳴らす。

「ま、十分笑わせてもらったし、今日は射精させてあげるね♡」

上半身を傾けて屈んだレイナ様が、金属製の貞操帯を解錠する。

貞操帯が外れた瞬間、これまで拘束されていたせいで勃起することが許されなかったペニスが一気に怒張して反り返る。

ピン、と張った肉竿は亀頭が腹部に当たるほど反って天を仰ぐ。ビキビキと浮かび上がっている血管と、ダラダラと流れている我慢汁が、この一ヶ月の射精我慢の過酷さを物語っている。

「もう射精する気満々じゃん♡ こんなソッコーで搾り取れちやいそう♡」

「うううっ♡ すぐ負けさせていたきたいです……♡」

「もう負けてるくせに♡ それで？ センセはどうやって射精したいの？ 選ばせてあげる。今日は機嫌良いし♡ また踏みつけられて射精したい？ それともパイズリが良いかな？ まだ直接おっぱいで挟んであげたことなかったしね？」

靴下を履いたままの足指でペシ、と亀頭を弾きながら、レイナ様が挑発的な笑みを浮かべて問いかけて来る。軽く触れられただけの刺激で射精しそうになるのを堪え、俺は「パイズリされたいです♡ してください♡」とおねだりしてしまふ。

「はいはい、パイズリねー。ほーんと、先生って私のおっぱい大好きだよね♡ そんならちよろいと私も楽だからいいけ

「んんん♡」

慣れた手つきでブラウスのボタンとブラジャーのホックを外してパイズリの準備を始めるレイナ様が、足でぐいと俺が座っている椅子を押す。

そうしてブラウスを羽織るだけとなったレイナ様は床に降りて膝をつく。

「あ、これあげるよ。あとでお金貰うけど♡」

カップの大きな黒レースのブラジャーを、レイナ様が俺の顔に投げつけてくる。

顔をすっぽりと覆うブラジャーの仄かな温かさと甘い残り香、そしてじっとりとした湿り気によって簡単にメロメロにされてしまう。

「よいしょ、と。じゃ、センスのクソザコちんちん、思いつきおっぱいで潰してあげるねー♡」

「お、お願いします……♡」

ブラジャーに染み付いたおっぱいフェロモンの匂いを鼻を鳴らして嗅ぎながら、開脚する。完全にレイナ様に股間を委ねてしまう、情けない言いなり奴隷の姿勢。

俺が屈従を表す姿勢をとったのを認めてから、レイナ様は太腿の付け根に豊満な乳房を乗せる。

「ううっ♡」

とろけそうなほどやわらかい柔乳の中でも特にやわらかな下乳の感触と、ずっしりとした乳房の重み、そしてじんわりと温かな体温に、まだ触れられていないペニスに反応する。

「すっかりおっぱいに弱くなっちゃってんじゃん♡ この調子だと挟んだだけで射精しちゃうんじゃないのー？」

下乳の極上のやわらかさを味合わせるように、レイナ様がむにゅむにゅと腿の付け根に乳房を押し当ててくる。圧迫に合わせてペニスがビクビクと震え、我慢汁を漏らしてしまう。

「せんせー、私のおっぱいの虜になっちゃったもんねー♡ 教え子のおっぱいにどンドン勝てなくなってマゾ悪化しちゃってんね♡」

レイナ様はわざとおっぱいをペニスに触れないギリギリのところでもにゅむにゅと動かし、腿にばかり柔乳の感触を伝えて俺を焦らす。一ヶ月も射精を我慢させられた上に、ペニスには触ってもらえずに乳房のやわらかさや乳肌のすべすべとした感触を味わわされるのは、甘くて苦しい拷問だ。

「は、挟んでっ♡ 挟んでくださいっ♡ お願いしますっ♡」

「ぶっ♡ ちょっと遊んであげただけですぐにおねだり、情けないねー？ センセ、わかってるう？ 生徒に手玉に取られてるんだよ？」

「わかってますわかってます♡ わかっているから、早くおっぱいで挟んでくださいっ♡ これ以上焦らさないでくださいっ♡」

自分から腰をへこへこと振り、ペニスを揺らしてアピールをする。情けないのもみつともないのもわかっているが、射精欲に支配された脳みそはレイナ様に媚びることしか考えられない。

「あーあー、ほんつとに情けないですねー♡ こんな人が教師やってるなんて信じらんない♡ ただのおっぱいマゾじゃん♡」

言いながら、レイナ様はゆっくりと太腿の上で柔乳肌を滑らせて乳房をペニスへと寄せいていく。

じわじわと迫り来る乳肉のむにゅむにゅふわふわとした感触に、ピクピクとペニスが震える。

ブラジャーによって視界を覆われている状態で、ペニスが挟まれるのを今か今かと待つ。期待と興奮で頭がおかしくなりそうだった。

そうして、いよいよ心臓の高鳴りがピークに達したところで、柔乳の谷間にペニスが挟み込まれる――

「はいまずいっかーい♡ おっぱいに潰されてイケ♡」

――となったところで、ばちゅん、とレイナ様が勢いよく乳房でペニスを挟み潰す。

「あああっ♡♡」

どびゅるるっ♡♡ びゅるるるっ♡♡♡

もちもちの乳房に挟まれた衝撃で、一ヶ月間溜め込んでいた精液は呆気なく噴き出してしまう。予告なく唐突に与えられた快感に身構える暇もなく射精させられたため、脳が快感を処理できずに一瞬気を失ってしまう。

「あはははっ♡ 射精して意識飛ぶとか弱すぎ♡ ほらほらあ♡ 一ヶ月我慢したんだから、もっと射精しないともっ  
たいないんじゃない?」

「あうっ♡」

先端から根元まで、ペニスをしっかりとむにゅんと包み込んでくる軟乳の感触に脳髓が震える。きめ細やかですべすべの乳肌はしっとり吸い付いてきて、柔乳肉はぬちゃぬちゃの白濁液と共にくびれや付け根の隙間に潜り込んでくる。

もちもちふにゅふにゅ、滑らかでやわらかな乳肉は重力によって流れ込むように腿の付け根や股間部分も埋め尽くし、ペニスのみならず股間が丸ごとレイナ様のおっぱいに包まれてしまう。

「あつ♡ ああつ♡ これ好きっ♡ 好きですっ♡」

「えー？ まだ動かしてないんですけどー？ 本当に挟んだだけでビクビクしちゃってるじゃん♡ ギョッ♡」

「あああつ♡ おっぱい、気持ち良くてっ♡」

たっぷりと脂肪を蓄えた肉厚の柔乳房にみっちりと包まれていると、心地良さに脱力してしまう。顔に被せられているブラジャーの甘い匂いや、じっとりとした温かさは思考を溶かし、俺はもうただ快感を感受するだけのカカシに成り下がる。

「どうですかー？ テストや通知表の改竄しちゃったご褒美のパイズリは？ 気持ち良いですかー？」

「はいい♡ 気持ち良いですう♡」

レイナ様のおっぱいが気持ち良いのはもちろんのこと、背信行為を働いたという事実が興奮と快感を何倍にも強めてくれる。

「教師としてサイテーのごとしてなのに気持ち良くなっちゃうとか、終わってんね♡ 先生みたいな雑魚マゾが教師でこっちは助かってるから良いけどー♡」

一ヶ月ぶりに直接ペニスを刺激される快感。その快感に抗うことなんて出来ず、俺はなすがままになってしまう。

しかも一ヶ月もの間、レイナ様のブラや靴下の匂いを嗅いでいながら射精は禁じられていたのだ。一度射精しても萎えることがなく、屹立したまま敏感になったペニスに軟乳のもちもちむにゅむにゅの感触をたっぷりと与えられれば、動

かされなくてもペニスが震えてしまうのは道理だった。

「このままもう一回射精させちゃおっか♡ 一ヶ月我慢して溜め込んだ精液、ちよろしく搾り尽くしてあげる♡」  
そう言うトレイナ様はペニスを根本から先端までしっかり包み込んだ軟乳を両腕で力強く押し、乳圧を一気に高める。

とろけそうなほどやわらかいのに、強く押すと弾力を感じるレイナ様のおっぱい。その谷間に挟み込まれているペニスは、もちもちの乳肉にみっちり密着されたまま、むにゅううと潰されていく。

「もちもちのおっぱいでマゾちんぶつ潰して、びゅくびゅくってなっさけないお漏らしさせてあげんね♡」  
肉竿が歪んでしまうように錯覚するほど強烈な乳圧。膨らんだ亀頭は揉み潰され、尿道も狭まっていく。

「うううう♡」

「うわ、嬉しそーな声♡ おっぱいでぶっ潰されて喜ぶとか、本当どうしようもないマゾじゃん♡」

おっぱいの弾力と重量を生かした乳圧締めを受け、ペニスの根元がとくんととくんと鼓動し始める。

「雑魚ちんちん震えてきちゃったねー♡ 潰されただけで射精しちゃうねー♡ 教師のくせに生徒の言いなりになって  
圧迫パイズリだけで射精させられちゃうの、悔しくないんですかー？」

「あううう♡ おっぱい♡ おっぱい♡」

「あははは♡ おっぱい気持ち良すぎて返事もできないなんて雑魚すぎ♡ まっ、私のパイズリプレスに耐えられた人なんかいないけど♡」

脂肪をたっぷり蓄え、もっちりとした軟乳にカリもくびれも裏筋も隙間なく埋め尽くされ、締め付けられる感触。荒

くなった吐息の熱で余計に香り立つ、ブラジャーのおっぱいフェロモン。

ただでさえ射精欲に頭の中を支配されている上に、それらに溺れて夢中になってしまっている俺はもう、レイナ様の言葉を言葉として捉えることすら出来ない。笑われ、バカにされていることを感じて興奮するだけ。

「やり慣れているナンパ大学生もお金持ちのパパも、みくんなおっぱい中毒のマゾちゃんに落としてきたパイズリプレス、先生みみたいな童貞が耐えられるわけないじゃん？」

くすくすと笑いながら、レイナ様はみちみちと乳圧を強めていく。それに伴って射精感も限界まで高まってしまい、表面張力を起こしていた我慢が決壊する。

「私のおっぱいに潰されて射精しちゃうとキー、射精障害になっちゃんだって♡ もう普通の女の子とのエッチじゃイケなくなっちゃうらしいけど、構わないでしょ？ どーせ先生は一生童貞のおっぱいマゾなんだし♡」

どくん、と一度、強くペニスの付け根が震える。とうとう二発目の白濁液が精巢から尿道へと吐き出されたのだ。

しかし、乳圧をぎちぎちにかけられて狭まった尿道の中を白濁粘液は容易には上ってこねず、ビクンビクンとペニスは虚しく震える。

「なっ、あっ、なんでえっ♡」

「くすくすくすっ♡ イってるのに射精出来ないの辛いでしょ？ 先生、わかるう？ おっぱいに負けるって言うのはね、こういうことなんだよ♡ おっぱいに負けた雑魚ちゃんは、射精するのもしないのもゼーンぶおっぱいに支配されちゃうの♡」

「射精っ♡ 射精っ♡ 射精したいですうっ♡ させてくださいっ♡」



「射精したいの〜？ じゃあほら、がんばれがんばれ〜♡ おっぱい押し返して射精してみせてね〜♡ せんせーは大人なんだからそれくらいできるよね〜？」

乳圧を掛けられて潰れた亀頭がぷくう、と膨らみ、肉竿はビクンビクンと何度も震えて白濁液を押し上げていく。必死に足をバタつかせ、腰をカクつかせ、身をよじって必死に射精を促進すると、細まった尿道を押し広げて精液がせり上がって来るのを感じられた。

「お、射精できそ〜？ 出す時はちゃんと言ったよ〜？」

「出るっ♡ 出るっ♡ 射精しますっ♡♡」

ようやく一滴の滴が鈴口から漏れ出し、そのまま深い谷間の中に緩慢な吐精を行う。

どっくん♡ どくっ、どくっ……♡♡

粘度の高い白濁液を、乳圧を掛けられた状態でゆっくりと吐き出していく。その度に腰が抜けそうなほどの快感を覚え、情けない声が漏れてしまう。

「どーお？ おっぱいで思い切り潰されながら射精するの、癖になるでしょ？ これ知っちゃったらもう私のおっぱい以外じゃ満足出来ないよ〜♡ 可愛いそ〜♡」

嘲笑うレイナ様の声を聞きながら、うっとり射精の残滓に浸ってブラジャーの甘い匂いを胸いっぱい吸い込む。

（あうう……♡♡ レイナ様あ♡ おっぱいいい……♡♡）

快感で溶けた脳におっぱいフェロモンが染み込み、全身を侵していく心地に酔い痴れていると、もぞもぞとおっぱいが動いてペニスを刺激される。

「ほらほら〜♡ 休んでる暇なんてないよー？ 今度はおっぱい動かしてあげる♡」

レイナ様が優しく乳房を動かし、ペニスを柔乳肌で擦り出す。もにゅもにゅむにむにと波打ちながら、やわらかくてきめ細やかなおっぱいがペニスを撫で回してくる。

「パイズリ気持ちいいねー♡ 真面目な生徒を裏切って私みたいな子の言いなりになるの幸せだねー？ ぷっ♡ マジ終わってる♡」

深々とした谷間に包み込まれているせいで逃げ場がないまま、ペニスはくまなく乳肌に吸い付かれ、にゅりにゅりと甘く擦られる。

「ほおら♡ おっぱいに包まれたまま擦られるとすぐに気持ち良くなっちゃうねー♡ かる〜くおっぱい動かしてあげただけで射精しそうになってんじゃん♡ 大人なんだからちよっとは我慢できないんですかー？」

とろけそうな夢心地の谷間に包まれたまま、ふわふわもちもちのおっぱいを交互に動かされて亀頭を重点的に摩擦される。

ただでさえ敏感な部分を、二度も射精してすっかり弱くなった状態でいじめられる。徹底的に、レイナ様のおっぱいは絶対に勝てないのだということを刻みつけられるかのように。

「ああっ♡ そ〜、弱いんですっ♡」

「知ってるー♡ だからいじめてんじゃん。いじめる時は弱点を狙うの、常識でしょ♡」

亀頭の表面をすべすべむにむにむの柔乳肌で擦られると頭の中が痺れ、排尿感に似たくすぐったさを覚える。張り出したカリの縁を乳肉がなぞるとその刺激はいっそう強くなり、射精欲が高まっていく。

「ああっ♡ おっぱいに負けるう♡ 負けちゃいますう♡」

「負けちゃいますう♡ じゃないんだよ？ せんせーはとっくに負けてんの♡ おっぱいマゾの言いなり奴隷になっただけとも忘れちゃったんですかー？ どこまでお馬鹿さんなんですかー？」

ぷるぷるの乳肉がくびれの中を満たしては離れ、また吸い付き、を繰り返す。その度に腰をくねらせてしまうほど、レイナ様の交互パイズリは気持ち良い。

「うううっ♡ パイズリ、パイズリ気持ち良すぎますう♡」

もにゅん♡ もにゅん♡ とおっぱいでペニスをこねくり回され、またも快感に負けて射精欲を抱いてしまう。

「あああっ♡ おっぱいだめえ♡ また負けるう♡」

既に二度も射精した為に谷間の中には精液が溜まっており、それが乳汗と混ざって潤滑油となる。レイナ様がおっぱいをこねくり回して交互に乳房を擦り付けるたび、ベチャベチャと白濁液が粘着質な水音を立ててペニスにまわりついてくる。

精液ローションによって、ねっとりしつつもスムーズなパイズリを受けてしまう。優しくて甘らかなのにどんどん絶頂へと押し上げていく刺激に、ペニスだけでなく全身が喜んでいた。

「そういうえばセンセー、貞操帯つけてる間はシコる代わりに乳首触ってろって言うておいたよね？ ちゃんとやってたみたいじゃん♡」

パイズリを受け続けたせいでシャツに浮いてしまっている乳首を見たのだろう。レイナ様が嘲笑混じりに尋ねてくる。

「はいっ♡ はいっ♡ やってましたっ♡」

「ふーん、じゃあ服脱いで乳首出してよ♡」

言われた通り、シャツのボタンを外して肌着をまくりあげ、乳首を晒す。

「うわ、もう乳首立ってんじゃない♡ やばあ♡ いつもどっただけ弄ってたわけ？」

「毎日一時間は……♡」

「やりすぎでしょ♡ そんなにいっぱいしちゃったってことは、相当弱くなっちゃってるよねー？」

そう言ってから、レイナ様は「ちゅぱっ♡」と唇を鳴らす。

「パイズリしながら乳首もいじめてあげたらどうなっちゃうのかなあー？」

「ま、待ってくださっ、そこはほんとに弱口なっちゃったから……」

「待ちませーん♡ じゃ6点をいじめるのは常識って言ったじゃん♡」

俺の制止の声に一切耳を貸さず、レイナ様は乳首に吸い付いてくる。

「ちゅぱっ♡ れろれろれろ……♡」

ぷっくらとした唇に啜えられた状態で、舌先でひたすらにねぶられる。この一ヶ月ですっかり性感帯に成り果ててしまっていた乳首は、レイナ様の舌遣いを受けて脳に快樂信号を送ってくる。

「ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡」

ふんだんな唾液をまとった舌で舐められた乳首を、レイナ様が今度は窄めた唇を押し当てるキスで何度も刺激して

くる。口付けを受けるたびに甘い電流が乳首を中心に放射状に走り、快感の渦に呑み込まれてしまう。

もちもちむにゅむにゅの軟乳パイズリと乳首へのキス責め。異なる二つの刺激のせいで脳みそが快感を処理できなくなり、何も考えられなくなる。

「レイナ様っ♡ レイナ様っ♡ レイナ様っ♡」

ペニスの先端部分を潰され、こねられて摩擦されて高まる射精感を、乳首へのキスが加速させる。

「イぎますっ♡ 射精っ♡ 射精しますっ♡」

「ちゅううっ♡ んぱっ♡ ちゅっ♡ ちゅぱっ♡」

情けなく喚く俺のことなんてお構いなしに、レイナ様は一方的に快感を与え続けてくる。

そしてとうとう三度目の絶頂に至る直前、レイナ様はずりりっとならぬとそれまでより強くペニスを擦り上げ、乳首を甘噛みする。

「あああああっ♡♡♡」

頭の中を真っ白に染め上げる快感を受け、一瞬の猶予もなく絶頂させられてしまう。

びゅるんっ♡♡♡ びゅるんびゅるん♡♡♡ びゅるんるん……♡♡♡

※

目を覚ました時には、既にレイナ様は教室を後にしていた。最後の絶頂で完全に失神してしまった自分を置いて帰ったのだろう。

慌てて服を着直し、下着とズボンをあげる。その際に感じ慣れた違和感をペニスに覚え、見ると貞操帯が付け直されていた。

(と、とにかく早く帰らないと……)

こんなところを誰かに見られたら問題になるため、急いで身支度を整える。

それから教室を出る前に、通知が来ていたスマホを確認する。やはりレイナ様からのメッセージが届いていた。

内容は「通知表の数字を改竄しておいてほしい生徒リスト」と、冬休みの間は貞操帯を外さないで射精管理するという旨の文章。

そして、つい先程撮られたばかりと思われる、一ヶ月溜め込んだ精液を搾り尽くした爆乳の谷間を開いた写真。黄ばみがかかった白濁液がたっぷりとかかり、両乳房の間に精液の橋が架かってしまっているその写真と、「これ見てマゾオナしてろ♡」という手書き文字に、俺はその場で乳首をいじり回してしまうのだった。